

JSOG Newsletter

# Reason for your choice

No.23  
October  
2018

わたしたちの医療は「新しい生命」を生み出すためのものです。ひとつでも多くの生命の誕生のために。すべての女性のために。いま、わたしたちができることを...

公益社団法人 日本産科婦人科学会  
JAPAN SOCIETY OF OBSTETRICS AND GYNECOLOGY



### アーティシストとプロフェッショナル

「りんくう総合医療センター」は高度救命センターを併設した地域周産期センターで、後背地人口50万人の産婦人科救急を引き受ける大阪で唯一、一次救急から三次救急までワンストップで受ける施設です。でもこの地域の3つの公的病院から産婦人科が撤退するという事態に直面しました。そこで近隣の7つの自治体と協働して産婦人科機能を

### 著名、有名な先生からの

## 若手に向けたメッセージ

りんくう総合医療センター 荻田 和秀先生



「市立貝塚病院」とバーチャルに合体して一つの産婦人科施設として運用し、市立貝塚病院を婦人科、りんくう総合医療センターを周産期科と救急対応にすることで機能の拡充を図ってきました。ですのでインバウンドの腹痛から社会的リスクを抱えた妊婦さん、交通事故の妊婦さんや産褥出血の妊婦さんなどが運び込まれてきます。通常の婦人科患者さんも合併症を持った妊婦さんも、もちろん正常妊娠の妊婦さんもやってきます。そして心肺停止になった妊婦さんも。

やめていったりというのを目の当たりにして、のけぞりました。それで勉強し直して医学部にもぐり込みました。それは父親が産婦人科医だったので他の選択が思い浮かばなかったからかもしれない。しかし卒業が近づくとつれ、自分ほどの診療科に行くべきか悩み始めました。興味があったのは、産婦人科と救急科。自分の適性がさっぱりわかっていなかったというのもあり、どちらか出来る科がいいなと思っていたのです。がそんなときに産科のポリクリをで立て続けに母体搬送の症例を見て、周産期って救急なんだと思ひ、産婦人科になることにしました。

実際産婦人科になってみると、内分泌科のような仕事があり、腫瘍外科のような大きな手術や腹腔鏡があり、実に裾野の広い仕事でした。そして生殖医療と周産期という、他の科にはない分野があります。その後大学に戻り研究をはじめました。分娩が何故おこるのか調べようと卵膜や胎盤の遺伝子ライブラリを作り網羅的解析をしたのですが...結局調べれば調べるほど責任遺伝子の存在を確認出来ず、「お産って分子生物学的にも神秘的だなあ」という結論になりましたがね。大学院を卒業して、大阪大学の周産期部門で本当に沢山の症例に当たりました。その中に里帰りした妊婦さんがいて、陣痛が来て駆けつけてこられたタンナさんに立ち会い分娩をして貰ったのですが、それがあの「コウノドリ」の作者

鈴ノ木ユウさんでした。世の中って本当に神秘的に出てくるものですね。

2008年に今の職場に移ってきて取り組んだのが麻酔科や救命センターと協働で重症妊婦の治療に当たるといシステム作りでした。産科は重症妊婦の全身管理はどうしても不得意で救急科は妊婦は不得意ですが全身管理と多職種診療するノウハウがあります。力を合わせれば出来ないことはない、と今でも思いながら仕事をしています。

ミュージシャンになろうとしたときに痛感したのですが、世の中にはほんの一握りのアーティストがいまです。それを支えるのはいつでもどんな状況でもアベレージ以上の仕事をするプロフェッショナルの存在です。外科などはそんなアーティストが魂を込めた仕事をします。でも、産婦人科特に周産期はアーティストなんか要りません。しっかりとチームで結果をだすプロフェッショナルのみが必要な職場だと思っています。

荻田 和秀  
りんくう総合医療センター  
産婦人科

### 産婦人科未来委員会 若手委員会 活動報告

若手委員長 小松宏彰

若手委員会は未来の産婦人科医をリクルートする目的で、2015年夏に設立し、4年目になろうとしています。我々の活動は主にサマースクール、プラスワンプロジェクト、スプリングフォーラムの3大イベントの運営ですが、いずれも産婦人科決定因子を裏付けるために専門医取得者から回収したアンケートを解析し、その結果に基づき活動を行っております。学会HP内にある若手委員会HPでは若手委員の思いをエピソードとして記載し、産婦人科を迷う学生・研修医に対する熱い思いを伝えています。また不安を取り除くために不安払拭スライドを掲示しました。

若手委員会の活動に加えて、会員の皆さまのご尽力により今年度の産婦人科専攻医は441名(前年度+50)となり、低迷期を脱出する兆しが見えました。若手委員会の活動は決して自分自身のためではなく、産婦人科の未来を創るために活動しております。時には挫けそうになることもありますが、若手委員の熱い思いが日本の産婦人科の未来に繋がるよう仲間を信じ、仲間とともに活動していきたいと思っています。さらにここで培ったノウハウを全国各地へ広め、地域差なく産婦人科医が増加することを切に願っています。



若手委員会 HP

### 第70回 日本産科婦人科学会学術講演会

学生企画

日本産科婦人科学会学術講演会における医学生フォーラムは、産婦人科に興味がある6年生を対象に、更に興味を持って頂き、全国の同志と切磋琢磨する時間を持つために開催している企画です。今回は例年より多い約130名の学生が参加し、16名のチューターの先生に各グループの進行をお願いしました。各自割り当てられたテーマ、①家族性腫瘍、もしあなたが家族性腫瘍の

家系だつたら、②産婦人科医の地域偏在、産婦人科医の地域偏在を解消するには、に關して事前学習をしてきてもらい、それを基にグループ毎に発表を行いました。どのグループの学生もしっかりとした事前学習を行っていたおかげで熱い議論が繰り広げられており、非常に密度の濃い話し合いを行えて

おりました。大ホールにて決勝発表の際には各大学の先生方も集まり沢山の観客の前での発表となりました。各学生が堂々と発表を行い、質問も沢山出て非常に盛り上がりました。新しい試みとして懇親会の時間を持ったことで、例年以上に全国の学生とのつながりを持つことができておりました。また、チューターの先生とも様々な話を出来ており、横のつながり・縦のつながりを作ることができたのではないかと考えております。今後そのつながりが続いてくれることと信じております。(東北大学 田中恵子)



決勝発表



第70回日本産科婦人科学会学術講演会が宮城県仙台市で開催され、日本国内と海外あわせて総勢7931名の御参加を頂きました。

仙台での開催は今回が20年ぶり4度目でした。大震災も経験し、日本全国のみならず海外からも頂いたたくさんの御支援に感謝の意を込めて、医局長、同窓会員一丸となって臨んだ学術会でした。

学会のメイン企画であるシンポジウムは、「婦人科治療戦略としての個別化医療の展開」基礎から臨床へ、「周産期分野の前方

# 第70回 日本産科婦人科学会 学術講演会のご報告

会期：2018年5月10日～13日  
会場：仙台国際センター、東北大学百周年記念会館川内秋ホール



八重樫伸生学術集会長

史的研究から得られた最新の知見と先制医療への展望」という2つのテーマで行われました。今回はシンポジウムと他のセッションの時間が重ならないようにプログラムを組み、多くの参加を頂き非常に活発な議論がなされました。

また、特別講演として、香川大学の秦利之先生に「新しい胎児行動学の夜明けを迎えて」というテーマで、また招請講演として総務大臣・女性活躍担当大臣・内閣府特命担当大臣である野田聖子先生に「女性が健やかに輝き続ける社会へ」というテーマでそれぞれ大変に興味深い御講演を頂き、会場は大盛況でした。

International Workshop for Junior Fellowsでは、「妊婦健診の各国の相違」と「産婦人科医のワークライフバランス」をテーマに各国の若手医師が活発な議論を行いました。

医学生を対象とした「産学生フォーラム」では、「産婦人科の地域偏在を解消するには」、「家族性腫瘍への



対応」という2つの問題に対して医学生がグループ討論を行いました。医学生からは「面白かった」という感想が多く聞かれました。このような機会を通じて産婦人科志望者が増加することが期待されます。

今回は新たな試みとして、演題検索システムアプリを用い、ランチョンセミナーの予約もアプリで取得可能となりましたが、それが有用であったと多数の御意見を頂きました。ポイント付与プログラムについては、参加予約がすぐに埋まってしまったことや、会場が狭かったことなど今後改善すべき点も多数ありました。

第71回日本産科婦人科学会学術講演会の舞台は名古屋です。

神話の世界から近世武家文化まで歴史に彩られた素晴らしい都市で、学術講演会がますます盛大に開催されます。事を祈念申し上げます。

▶全文はWEBサイトに掲載しております。ぜひご覧ください！

## ACOG2018参加報告 順天堂大学 産婦人科 寺尾泰久

初日はOpening Ceremony、President's Program Lectureに出席し、Resident Reporter & Japanese Delegation Sessionに参加し、「Moo～」のLectureを受け、ACOGのレジデントの先生とLunchをしました。Are You Smarter Than a Junior Fellow? Session (Stump the Professor)に参加し、アメリカのフェローの知識が豊富な方には驚かされました。夜はWelcome Receptionに参加し、アメリカ国外からの参加者とも交流を深めることができました。

2日目はACOGのJunior Fellowの活動を聴講しました。午前中は各自のセミナーに参加しました。午後は若手メンバーの発表がありました。まず、1分間くらいで各自の研究内容を発表し、その後自由討論でした。質問にも堂々と返答しており素晴らしい発表だったと思います。夜はMix and Mingle JSOG Alumni Receptionがあり、各大学の同窓会を一会場に集めて行うような形式で新たな試みだったようです。

3日目はPresidential Inauguration and Convocationでした。次期学会長の演説とフェローの修了式が行われました。修了式には家族も参加しており、大学の卒業式を思わせるものでした。午後はSeton Medical Center Hospital Austinへの病院見学に行かせていただきました。

最終日Young Physician Breakfast Forumでした。アメリカも子育てしながらの研修や就労の問題があり、この国も同じことに悩んでいるのだと思いました。その後、各自事前に申し込んだ3時間のHands-OnあるいはPost Graduate Courseに参加しました。今回、若手メンバーみんな仲がよく、海外の若手との交流を積極的に行っており、初日に飯笠幹事長がBBQを食べながら、「横のつながりを大切に下さい」と言われたことは、ひとまず出来たと思います。私自身ACOG初参加であり、自分自身が楽しく有意義な経験をさせていただきました。



## 日米若手医師交換プログラム参加体験記

### The American College of Obstetricians and Gynecologists

日本産科婦人科学会の若手医師育成プログラムの企画として、2018年4月27日から30日までアメリカTexas州Austinで開催された米国産科婦人科学会 (American Congress of Obstetricians and Gynecologists : ACOG) の2018 Annual Clinical and Scientific Meetingに参加させていただきました。このプログラムは、日本と米国の若手の医師を互いの国に派遣し、交流を行うことを目的としており、日本からは6名の若手医師が参加しました。



若手医師同士でメンターシップ制度について議論するディスカッションにも参加させていただき、そこで驚いたのはアメリカでは半数近い医師がバーンアウトを経験するという事実でした。日本でも医師免許取得後の医師の離職について取り沙汰されることはありますが、アメリカでも同様の問題があるのかと、学会の講習を聞くだけでは知ることのできない意外な一面を知ることができました。(京都大学 中村彩乃)

いくつかセッションに参加させて頂き、日本との違いに関しても感じることができました。特に印象に残ったのは、鉗子と吸引分娩のハンズオンセミナーです。骨盤の模型、胎児の模型を用いてシミュレーションを行うという日本と同様の形で行われておりましたが、米国の様々な地域の先生方と一緒に手技を行えたのは非常に勉強になりました。(東北大学 田中恵子)

アメリカの医療については色々聞いていましたが、実際に見聞きたものはこれまでの想像を大きく超えていました。一方で、アメリカと日本では、患者層も医師の教育体制も妊娠・分娩の管理法なども大きく異なっており、一概にどちらが優れているということもないように感じました。ただ、現状をよりよいものにしたいと思ったときには、このような幅広い知見が役立つだろうと感じました。(福岡大学医学部産科婦人科学教室 漆山大知)

アメリカのレジデントから、専門医試験は筆記以外に3時間の面接があって非常にハードなことや、フェロシップを行う病院への就職は競争が激しいことなどを聞き、その中で必死に修練している彼らの姿を感じました。また、日本の若手メンバーには日常診療や研究を行う傍ら、産婦人科医育成の活動にも積極的に参加している方が多く、将来の産婦人科界を担う意識の高さに刺激を受けました。(東京医科大学病院産科婦人科学分野 土田 奈々枝)

Seton Medical Center Hospitalで見学させて頂きました。分娩数は月に約400件あり、産科医師は40人程度いるが専門医は5~6人とのことでした。案内して頂いた医師より、日本では妊娠22週から新生児を蘇生することに対して、予後についての質問がありました。アメリカでは近年になり予後の改善に伴い23週から蘇生するようになってきていると聞き、医療文化の違いをここで実感しました。(近畿大学医学部産科婦人科学教室 高矢 寿光)

米国の産科婦人科の臨床の実際について講義や病院見学から学ぶことができました。医療問題や関心事が日本の数年先を進んでいることや、訴訟が多い国ならではの徹底したリスク管理などが印象に残りました。ACOGは臨床医のための学会であり、全米の臨床医が最新の診断法や治療についてアップデートするための教育の場なのだと思えました。(和歌山県立医科大学産科婦人科学講座 南條 佐輝子)

▶全文はWEBサイトに掲載しております。ぜひご覧ください！

私が産婦人科に最初に惹きつけられたのは、帝王切開で初めて出産に立ち会ったときでした。帝王切開の手術や児がでてくるまでの速さに驚き、間近で出生に関りとても感動しました。その後の学生実習、初期研修を通して沢山の魅力を産婦人科に感じ、専攻として考えるようになりました。

産婦人科では胎児期から妊娠・出産、更年期を経て終末期まで、女性に限られてはいますがライフスパン全てに総合的に関わります。医療面に関しても検診で疾患をみつけて診断するところから始まり、治療を行いフォローまで携わる事ができます。また治療ひとつをとっても内科的治療が良いのか外科的治療が良いのか、腹腔鏡手術か開腹手術かなどそれぞれの患者さんに寄り添った治療を一緒に模索することができます。私は婦人科の症例が多い病院で専攻医1年目を研修し、産科の症例が多い病院で専攻医2年目を研修し始めました。多岐な分野が広がるからこそ学ばなくてはならないことも多く、どの時期においても精神的ケアなどが重要となり難しい面もありますが、その反面やりがいがあると感じています。日々研鑽し一人前の産婦人科医になりたいと考えています。

## 研修医の声

研修医の方々に、産婦人科を選んだ理由や、産婦人科に寄せる夢を語って頂きました。



患者さんに寄り添った治療を一緒に模索する

その患者さんに寄り添った治療を一緒に模索することができます。私は婦人科の症例が多い病院で専攻医1年目を研修し、産科の症例が多い病院で専攻医2年目を研修し始めました。多岐な分野が広がるからこそ学ばなくてはならないことも多く、どの時期においても精神的ケアなどが重要となり難しい面もありますが、その反面やりがいがあると感じています。日々研鑽し一人前の産婦人科医になりたいと考えています。

愛媛大学医学部産科婦人科学 吉田 文香



産婦人科という入り口から広がる世界

自分が難産を経て生まれ、助けてくれたのが女医だったという話を母から聞いたことが、産科医になることを考えたきっかけでした。実習でお産に立ち会い、新しい命が生まれるという奇跡に関われることに魅力を感じました。忙しい科というイメージはありましたが、周囲から「本当に産婦人科に行くの？大変だから考え直したら？」と言われることも多かったです。実際に初期研修医として働いてみて、興味を持っている分野であることを再認識し、これなら忙しくても頑張っていけるのではないかと感じました。また、女性の一生に関わることができる科であり、女性であることを活かせる科だと思ったこと、産婦人科という入り口から広がる世界が多様であることがこの科を選んだ理由です。

専門研修が始まって3ヶ月、やはり忙しいですが、大変充実した毎日です。大勢の同期と助け合い、切磋琢磨しながら日々頑張っています。まだまだスタートラインに立ったばかり、日々1つでも多くのことを学べるよう努力し、どんな時も患者さんファーストの心でいたいと思います。女性の活躍が目立っている今、頑張る女性をサポートできる産科医を目指し、これからも精進していきます。

慶應義塾大学医学部産科婦人科学教室 桑名 温子